わが国における
サッカー競技の展開過程
——黎明期——

恩田　裕

(一)

明治34年，文部省令第3号「中学校令施行規則」[1]に基づいて文部省訓令第3号「中学校教授要目」[2]が発令され，「特ニ適宜各種ノ遊戯運動ヲ奨励スヘシ」として，中学校においても，従来から行われていた普通体操・兵式体操を中心とした正課体育の外に，課外教育活動の一環としての，西洋伝来の近代的スポーツ競技に対しての関心が高まり，野球・庭球等と共にフットボール（サッカー競技）も盛んに行われるようになった[3]。やがてこれ等は，当時，中等教育段階の正課体育に関しての中心的教材であった普通体操・兵式体操の著しい形式化・硬直化に対する反動として，この分野にも積極的な組み込みが図られ，その結果，広場とボール一個で，比較的安全に，大勢の学生生徒の運動欲求を満たすことが出来るサッカー競技に対して，教材研究としての重要性が著しく高まったのである[4]。

明治期のわが国のサッカー競技は，前述の通り，東京高等師範学校を中心とする師範・中等教育部門を母体として，全国的普及の方途についたもの，つまり唯一のサッカー競技の実践者である東京高等師範学校に対して，全国の中学校・師範学校から強力に指導的立場が求められ，それを契機として急速に近代的スポーツとしてのサッカー競技が，全国的規模の展開を示したものと理解出来るが，然しながら，この展開の経過に対する技術的・戦術的立場からの接近は，移入されたサッカー競技の実体的内容構造が形

成された過程を検討する客観的資料が提起されぬままに，新田[5]・多和[6]・竹腰[7]・大谷[8]・村岡[9]・堀江[10]等の，わが国サッカー競技を特定しての優れた史的論考においても検討し尽くされたとは言い難い。

近代的スポーツ競技としてのサッカー競技を今日的姿にまで完成させ，世界に広めた英国においては，サッカー競技を史的立場から捉えて技術的・戦術的論議を加えたものに，マープルス[11]を始め，ヤング[12]・デラニイ[13]・ロジャック[14]・ジョイ[15]等の著作がある。これ等は豊富な資料に裏付けられた通史的展望に始まって，現代のトップ・チームの戦力分析に至るまでの詳細かつ膨大な内容を含んでおり，当然のことながら，その黎明期におけるフットボールの実体的内容構造を明らかにする試みや，発展経過に対する技術的・戦術的立場からの検討も加えられている。然しながら，英国における初期のサッカー競技の発展経過は，社会構造の変容を背景とした，いわゆるパブリック・スクールを中心とした学校教育自体の熟成に関連して，スクール・フットボールとして競技規則の制定・修正を繰り返しつつ，次第にその実体的内容構造が形成されたのを起点として[16]，更にはイングランドとスコットランド，有力クラブ・チーム同志等のフットボール的に対立する集団間の競技力向上に関する抗争[17]を原動力とした，極めて長期間の技術的・戦術的熟成の必然的経過をたどって来たものと考えられ，わが国の如く，近代的スポーツ競技として完成されたサッカー競技を，競技規則並びに運動様式の観念的理解を通して移入し[18]，常に英国に代表される競技力に関しての上位集団から，その技術・戦術に関する情報を摂取することによって，短期間に競技力の向上を図ったが如くの発展経過をたどったものとは極めて異質であり，同じに論ずることは出来ない。

小論においては，わが国におけるサッカー競技の移入・発展の歴史的経過と，今日における学校教育を母体としたサッカー競技に関する未熟練者の運動学習経過とが，極めて類似した傾向を示すことに着目し[19]，歴史的発展経過を技術的・戦術的立場から論議の対象として捉えることによって，サッカー競技としての運動形態が他に転移する場合の一般的傾向，及び高

度な身体的能力や技術的・戦略的習熟に関わる問題点を明らかにし，同時にサッカー競技に関わる未熟練者が，運動学習途上で遭遇する様々な障害を指摘し，その学習内容及び方法を考慮することによって，予想される障害の除去に成功する可能性を予見するものである。

由来，わが国のサッカー競技の展開の過程は著しく段階的であり，オリンピック大会への参加や，優れた指導者の出現を契機として，短期間に飛躍的に競技力を向上せしめたものと考えられ，これは内部的な熟成過程を経なくとも，信頼性の高い経路を通して，一度に大量の技術的・戦術的情報が流入し，これが全国的規模の個々の集団に積極的に摂取吸収されることによって惹起された結果として理解出来る。その第一段階は，明治36年東京高等師範学校フットボール部によって『アッソシェーション・フットボール』と題する指導書が刊行され[20]，まず競技規則や運動様式に対しての基本的理解が図られ，同部の意欲的な活動は，横浜外人クラブ等との実戦的経験を経てより一層充実したものとなり，明治41年の同校校友会蹴球部による再度の『フットボール』刊行に継承され[21]，わが国における近代的サッカー競技としての技術的・戦術的展開の起点となったのである。次いで第二段階として，大正末年頃におけるビルマ人モン・チョー・ディンの指導に触発されたショート・パスを使用し始めた時代を挙げることが出来る。これは，英国においても単に蹴って走り，もみ合い押し合う原初的なフットボールが，1870年代におけるイングランドとスコットランドのフットボール的な対立を通して，スコットランド側の主導によるショート・パスの有用性に関しての認識が高まり，以後の技術的・戦術的展開が触発された[22]のと同様に，わが国においても素朴で荒々しい単に蹴って走るサッカーの攻防に，技術的・戦術的要因を抽入せしめたものとして評価してよい。第三段階は，昭和11年に行われた第11回ベルリン・オリンピック大会への出場を契機として２バック・システムから３バック・システムへの転換が行われたこと[23]，第四段階は，昭和30年代に入って諸外国から有力チームが来日し，又日本代表チームが海外に遠征して学んだ４：２：４シ

ステムに代表される組織的攻防の原理に目覚めた時代を挙げることが出来る[24]。第五段階は，昭和39年の東京オリンピック大会の開催を目指して積極的強化策をとった日本サッカー界が，西独から極めて運動学的素養の高いデトマール・クラマーを指導者として招聘し，精密なボール・コントロール能力と戦術的能力の合一を基調として，東京及びメキシコの二度のオリンピック大会に好成績を残した時代である。その後，日本サッカー・リーグの誕生，単独チームで外国から優秀な競技者を補強して競技力の向上を図り，競技者のプロフェッショナル化問題など，画期的な変化の機会が訪れているが，対外競技にその目覚ましい成果が表れるには至っていない。

本稿は，以上に述べた第一段階から第二段階に移行した過程を主題とし，東京高等師範学校校友会蹴球部から明治41年に刊行された『フットボール』を，前著との比較において，英国にて刊行された指導書の単なる和訳本ではなく，その実際的経験に基づく記述の独創性を評価して，その示されたサッカー競技の実体的内容構造を検討する資料とし，次いで，大正12年に刊行されたモン・チョー・ディンの著した "How to Play Association Football" に示されたサッカー競技としての技術的・戦術的展開に着目し，その実戦的認識の度合いや，実体的内容構造が形成されるに至る経過に対して若干の検討を加える。これは前述の通り，サッカー競技の技術や戦術を学習する過程は，その歴史的・技術史的展開の過程を時間的に極度に短縮したものとする立場から，学習及び指導上の原理的側面に対する接近の方途を探ぐり，学習者及び指導者の便宜に整合するサッカー競技の実体的内容構造を理解する基本的資料となることを期待してのことである。

1) 文部省教育史編纂会，『明治以降教育制度発達史』，第4巻，178—191頁。
2) 前掲書，192—268頁。
3) 拙稿，本邦におけるサッカー競技の移入と展開について，明治後期，成城大学法学会，成城法学教養論集，第5号，昭和60年。
4) 拙稿，わが国におけるサッカー競技の技術史的展開，成城大学法学会，成城法学教養論集，第6号，昭和61年。
5) 新田純興，日本蹴球協会，『日本サッカーの歩み』，講談社，昭和46年。『図

説サッカー事典』，講談社，昭和46年。
6) 多和健雄，サッカーの技術史，岸野雄三・多和健雄編著，『スポーツの技術史』，478—515頁，大修館書店，昭和47年。『サッカーのコーチング』，大修館書店，昭和49年。
7) 竹腰重丸，『サッカー』，旺文社，昭和31年。
8) 大谷四郎，『サッカーの魅力』，朝日新聞社，昭和42年。
9) 村岡博人，『これがサッカーだ』，至誠堂，昭和41年。
10) 堀江忠男，『わが青春のサッカー』，岩波書店，昭和55年。
11) Marples, Morris., "*A History of Football*", Secker & Warburg, 1954.
12) Young, Percy., "*A History of British Football*", Stanley Paul, 1968.
13) Delaney, Terence., "*A Century of Soccer*", F. A., William Heineman, 1963.
14) Lodziak, Conrad., "*Understanding Soccer Tactics*", Faber & Faber, 1966.
15) Joy, Bernard., "*Soccer Tactics*", Phoenix House, 1962.
16) 拙稿，前掲書，第6号。
17) Lodziak, Conrad., op. cit., pp. 22—23.
18) 拙稿，本邦におけるサッカー競技の移入と展開について，明治初中期を中心として，成城大学法学会，成城法学教養論集，第3号，昭和57年。
19) 拙稿，前掲書，第6号，40—41頁。
20) 前掲書，26—35頁。
21) 前掲書。
22) Lodziak, Conrad., op. cit., pp. 22—23.
23) 拙稿，サッカー競技における組織的行動の原理についての一考察，4：2：4システムの移入と展開を中心として，成城大学法学会，成城法学教養論集，第2号，昭和56年。
24) 前掲書。

(二)

明治41年に刊行された，東京高等師範学校校友会蹴球部編纂になる『フットボール』は，新帯国太郎，落合秀保，細木志朗，重藤省一の四名を中心として執筆された，発行部数一千部[1]，刊頭に嘉納治五郎先生の鍛練の書，校友会蹴球部長坪井玄道の序文を掲げた百九十三頁の堂々たる指導書である。自序には，明治36年刊の『アッソシェーション・フットボール』

は，わが国におけるサッカー競技創設の当初にその競技方法を概説したもので，その真髄に触れることが出来なかった。今日まで記者等は多少の競技経験を積み重ねることによって，実際の競技に当っては幾多の方法上の疑問が生じて来た。そこで，この数年間，外国人との競技を毎年一・二回ずつ行うことによって新知識を得ることが出来たので，当書の全面的な改訂を行ったとする記述がある。ここで言う外国人との競技とは，『東京教育大学サッカー部史』[2] によれば，横浜等に寄留する外国人達との試合を指すもので，明治37年に横浜アマチュア倶楽部と対戦，60分の試合で9対0で敗れている。その反省として，戦略の点について今後より一層の研究が必要であること，「一致協力を欠き個人の巧名を得んとする傾きがあるが如きは，全体の勝敗の上に影響する所少なしとせず」[3] と述べられ，実際は単純にボールを蹴ったり止めたりする基本的競技力において明らかな格差があったであろうことには言及されず，その運動様式に不慣れな未熟練者に多く見られるのと同様な，組織的行動原理の不足に惹起された，単に大勢でボールを追い回す状況が記者等に強く印象づけられたものと思える。明治38年には横浜外人対抗マッチが行われ，45分ハーフの試合で前半5対0，後半1対1のスコアーで敗れているが，「されど我が部員の進境，実に驚くべきものあり」[4] と自賛し，「彼のパッシングの巧妙さと，蹴込みの正確さとは，容易に学び易からず」[5] と述べ，彼我の，ボールを止める蹴るとした基本的な技術水準の相違に目覚めている。この段階は，未熟練者の運動学習過程で，運動様式の理解に次いで遭遇する大きな難関の一つで，ボールを様々な状況に応じて蹴りわける技術を習得することの難しさを意味している。明治39年には横浜外人対抗試合が行われ，60分試合で1対0のスコアーで再度敗れている[6]。又同年には東京築地外人対抗試合が行われ，90分試合で1対1のスコアーで引き分け，「然れども我れの技量に於て彼れに勝れること数等なるを示しぬ」[7] と述べられている。明治40年には横浜外人マッチが行われ，90分試合で6対0で敗れた他，横浜ボイスブリゲート・マッチ，築地外人マッチ等々の記録が残されていると

ころから[8]，当時の東京高等師範学校校友会蹴球部の競技者達の新技術習得を目指す意欲の高さを窺うことが出来る。

自序では更に，諸方の中学校・師範学校等から，このフットボールの競技方法等について問い合せが寄せられたので本書を刊行したとする経緯が述べられている。当書は「凡そ運動は如何なる運動でも，その物が目的ではない。身体を練ると同時に精神の修養をなし，他日大に活動する土台を作るのである」[9] とする態度を一貫してとり続け，「目的を犠牲にして手段たる運動に熱中する如きは実に愚の極みである」[10] と述べ，その点フットボールは時間制限があり，一度に多数の者が競技することが出来，個人主義を排し，心身の健康保持に有益で，然も運動に要する用具はボール一個ですみ，日本人の体格が，特に脚の部分において著しく外国人に劣っていることを認めて，この欠点を補い，学生にとって最もふさわしい運動であると，その効用を力説し，学校教育を母体としたサッカー競技の実践に際しては，あくまで教育的効果を期待する立場が堅持されているのである。

わが国におけるフットボールの歴史的展望としては，明治11・2年頃に体操伝習所で行われていたフットボールが各地方でも行われるようになり，その様式は伝播途中で誤って伝えられたり，各地方で独自の様式をたてたりして種々様々であると述べ，数年前東京高等師範学校で正式のフットボールを始め，横浜の外人と試合を行ったが，まだ大いに発展の余地があるとし，更に一昨年頃から，東京府師範学校でもフットボールを始め，昨年11月に当校と試合を行い，これがわが国における日本人同志のフットボール・マッチの始めであると述べている。この試合は明治40年11月16日，東京高等師範学校の校庭で行われた，対青山師範学校の試合で，8対1のスコアーで東京高等師範学校が勝っている[11]。又，慈恵医院医学専門学校との試合にも触れ，「東京に於てこのように一時に勃興しつつあるのみならず，各地方に於ても又頻りにフットボールの声が高くなって愛知県，山形県，福島県，茨城県，埼玉県等の各師範学校では已に盛んにやって居る。その他中学校等でもやっている所もあるし，又始めようとしている所も沢

山あるようである。遠からず各地に勃興するであろう」[12] と述べ，全国的普及の度合いを伝えている。

次に示すのは，当書と現行の競技規則の間の若干の相違点である。まず，全てのフリー・キックから直接の得点は認められておらず，間接フリー・キックとなっているが[13]，F.A.においては1903年（明治36年）に故意のトリッピング，バック・チャージ，プッシング，ジャンピング・アット，ホールディング，故意のハンドリングの七項目の反則に対する処罰規定として，フリー・キックからの直接の得点を認めているところから[14]，当書の採用している競技規則は，それ以前に刊行された規則書によったものと判明する。又，ファール・スローに対する罰則としてフリー・キックが与えられているが，これはF.A.においても1931年（昭和6年）に相手側スロー・インと改めたものであり[15]，ゴール・キーパーの手を使用出来る範囲は自陣内なら何処でも良いとされているが，これもF.A.において自陣ペナルティ・エリア内のみに限定されたのが1913年（大正2年）であり[16]，同じくゴール・キーパーはボールを持ち運んではならないとされているが，四歩を越えなければボールを持ち運んでも良いとされたのが1931年（昭和6年）であり，オフ・サイド条項に該当する相手側競技者の数が三人となっているが，これも二人に改正となったのが1925年（大正14年）であり[17]，スロー・インに際してもオフ・サイド条項が適用されているが，これも1921年（大正10年）に改正されてオフ・サイドではなくなったこと等から[18]，当書の競技規則はF.A.に準拠したもので，競技規則が変ることによって，その当該競技の実体的内容構造までが大きく変化した事実は察知出来ない。

当書の内容は，第一編緒論及び歴史，第二編フィールド・競技者の人数と位置・競技者の任務・審判・ゲームに用いる言葉の意味・用具，第三編ゲームの規定，第四編練習方法・服装，及び附録として著者等の実戦的体験に基づいたポジション別の技術的・戦術的概説より成っているが，これまで，緒論・歴史を通して競技の背景を述べて来たので，以下で「競技者の任務」として示された内容に対して若干の考察を加え，わが国サッカー

競技の技術的・戦術的展開過程を検証する試みの一助としたい。

当書が競技者の任務として述べている内容は，同時にその任務を遂行するために必要な競技者としての性格特性及び技術特性を含んでいる。ゴール・キーパーに対しては最後の防禦を任とする立場から沈着果断な性格が求められており[19]，フル・バックに対しては，その任は専ら防禦丈ではあるが，群がり来る敵を追い払う立場として強蹴・機敏が必要条件とされ[20]，ハーフ・バックに対しては防禦と攻撃の両方を任とする立場から疾走及び奪球の能力が[21]，フォワードは攻撃的立場を主として軽快・蹴渡し・正蹴の能力に優れていることが要求されている[22]。この競技者のポジション別適性とも言うべき概説を，現代的なサッカー競技において要求されている一事例と比較してみよう。

1960年からスペインのレアル・マドリッドを指導して，1969年までの間にスペイン選手権8回，ヨーロッパ・カップ2回，世界クラブ選手権1回の優勝をもたらしたミヘル・ムニョスは，各ポジションにはそれに対応した特殊技術や個人的特性が必要であるとする立場から，ゴール・キーパーに対しての必要特性として，長身かつ強靱な身体，ボール扱いの確実なこと，すばやい反応，勇気をあげ，フル・バックに対しては非常に速いウイングに対応する思考のスピードと手足のスピード，予測能力，反撃の起点となるべくボール扱いの巧みさを，センター・ハーフに対してはヘッディング能力・冷静さ・予測力・スピード・タフネスをあげている。サイド・ハーフには臨機応変で頭脳的であるうえに，精力的でボール・コントロール能力に秀いでていること，ウイング・フォワードは速く勇敢でボール扱いが巧みなこと，シュートを左右何れの足でもうてる能力が求められている。インサイド・フォワードは攻撃と守備の両面を兼ね備えたスタミナとヘッディング能力，両足でのシュート力，ゲームを予測する能力，相手の密着マークをはずしてパスを受ける能力が必要とされ，センター・フォワードに関しては，以前には力とスピードで相手をかわし，強力なヘッディング・シュートで得点する能力が求められていたが，今日では，より一層

頭脳的でボール技術に優れ，中盤の味方とのコンビネーション，得点の機会をものにするのと同様に，味方に対して得点の機会をつくってやる能力が要求されているのである[23]。

この両者の間には，競技者のスピード，ボール・コントロール能力，ゲームの展開を予想し構成する能力等の必要性に対する認識に決定的な相違があり，これ等の点に近代サッカー競技の技術的・戦術的発展の系譜を窺うことが出来る。例えば，わが国の黎明期のサッカー競技においては，専守防禦とする比較的単純な任務をもったフル・バックに関し，時代的にこの両者のほぼ中間に位置する竹腰は「サッカーを始めた三十四・五年前のフル・バックには，敵に圧倒されないだけの大きな体格の者をあて，ゴール前に待ち構えて大きく蹴り返すことを主要任務としていたので鈍重でもキックとタックルの強いことが必須の条件とされた」[24] と述べ，前者の見解を裏付けている。但し，前者では機敏さが求められているのに対し，竹腰が鈍重でもと述べているのは，力強さと機敏さを兼備する理想的な競技者が求められない状況では，力強いことが何にもまして優位な条件であったものとして理解出来る。竹腰はフル・バックの適性として，その力強さに加えて機敏さと快足ウイングに対抗し得る走力を絶対的必要条件として挙げ，更に味方の他の守備者と協同する様々な戦術的素養を要求しているのであり[25]，ミヘル・ムニョスにおいては，その上にゲームの展開を予測する能力とボール・コントロール能力を加えてフル・バックの必要条件と考えているのである。つまり，フル・バックの任務に関する技術的・戦術的展開は，2バック・システムにおいてはまず力強いことを必須の条件とし，3バック・システムの抬頭と共に機敏性・スピードが求められ，味方との協同に関する様々な戦術的素養と共に，予測能力やボール・コントロール能力が要求される方向に進展して来たものと考えられ，近代サッカー競技におけるフル・バックの基本的ポジション適性は，心身共に力強く，機敏性・スピードに富んだ身体的特性を，現に保有しているか，或は将来的に明らかに期待出来ることが，まず求められているのである。

ハーフ・バックに関して竹腰は，攻撃と守備の中継役としてばかりでなく，中盤戦における主要担当者として位置づけ，その守備的任務として，中盤戦の戦況は定型がなく選択の自由のきく複雑なものであり，巾広い活動が許されるとした立場から，激しい活動力と適切なポジション感覚を活用して相手側のインサイド・フォワードの活動を封ずるにあるとし，攻撃的任務は「味方攻撃の浸透力はウイング・ハーフの賢明な判断による正確で時機をえた好フィードにかかっているといって過言でない」と述べ，それを可能にするにはボール・コントロールに熟達し，時機をはずさず即刻に正確なパスが出来る技術が必要であり，敵と味方との位置関係及び敵の意図を察知して，いわゆる「あいているところ」を発見したり，自らの活動で「あいているところ」を作り出す戦術眼が必要だとしている[26]。この三者に共通しているハーフ・バックのポジション特性は「激しい活動量」に対する要求であり，次第に相手の保有するボールを奪う能力から，攻撃の組み立てに重要な意味を持つ感覚的部分にまで至る全能的な競技力が要求されるようになる。ミヘル・ムニョスは，このポジションにはセンター・ハーフ的特性の者と，攻撃の組み立てにすばらしいセンスを発揮する，二人の競技者を別々に配置することを提案しているが[27]，これは要求される能力が個人的負担に耐えない程多種多様な場合には，異質なタイプの競技者各個にその能力を分担させることによって解決を図ったものと理解出来る。つまり，中盤における競技者の技術的・戦術的展開は，激しい活動量を伴った守備的任務に始まり，次第にその任に当る競技者全員が等しく守備と攻撃の二面的機能を兼備する過程を経て，やがて中盤を分担する，タイプの異なる競技者を増員することによって，各個の異質な技能や感覚が組み合わさり，その過重な要求に答えるべく進展して来たものと思える。

フォワードに関して黎明期のそれは，前述の通り専ら攻撃的任務のみを想定して，パスとシュートの能力に優れていることが要求されていたのに対し，竹腰はフォワードの任務を更にウイング・インナー・センターとポジション別に細分し，ウイングにおいては走力と共にパスとドリブルといっ

た比較的チャンス・メーカー的役割分担を求め，インナーについては相手側のハーフ・バックに対抗する中盤戦の主役として，ハーフより攻撃的で味方の攻撃を組み立て，円滑に侵入出来るように企画し，得点者ともなり，然も尚相手の攻撃の発端を防害する任務を，センターに対しては攻撃の完成者としての得点を期待しているのである[28]。従って，三者に共通して望まれるフォワードの任務はまずシュートであり，次第にそれに至る過程での役割が重要となるに従って，後方から攻め上がって来る味方競技者を援助する意味での頭脳的・感覚的分野での比重が重くなったものと思える。

これまで概観して来た如く，競技者のポジション的特性は時代に即応して若干の変容を示して来たが，それらには明らかにポジション別特性の同化の傾向を窺うことが出来る。然しその方向性は守備から攻撃を指向し，攻撃を任とする者の守備に対する要求よりも，守備を任とする者への攻撃に対する役割分担の要求の方がより顕著である。これは後述する競技者配置の原則が，次第に後方に位置する競技者を増員する傾向にあることと関連して，全体の攻守のバランスが保たれていると考えるのが至当である。

1) 埼玉県サッカー協会，『輝く埼玉サッカー75年の歩み』，78頁，昭和58年。
2) 東京教育大学サッカー部編，『東京教育大学サッカー部史』，恒文社，昭和49年。
3) 前掲書，50頁。
4) 前掲書，56頁。
5) 前掲書。
6) 前掲書，60—61頁。
7) 前掲書，63頁。
8) 前掲書，71—73頁。
9) 東京高等師範学校友会蹴球部編，『フットボール』，大日本図書株式会社，明治41年，1—2頁。
10) 前掲書。
11) 東京教育大学サッカー部編，前掲書，76—77頁。
12) 東京高等師範学校校友会跡球部編，前掲書，14—15頁。例えば，埼玉師範では，明治39年にフットボール部が誕生し，弓道と共に「大弓フットボール部」と呼ばれ，発足時は十数人の部員であったが，五年後の明治44年には，

五十余人という大世帯になっている。時の小島政吉校長は，課外運動の必要性を説き，徒歩，野球，庭球，相撲，などと共にフットボールを奨励した。埼玉県サッカー協会編，前掲書，70頁，83—84頁。

13) 前掲書，51頁。

14) Rous, Stanley., Ford, Donald.,"*A History of the Laws of Association Football*", p.108, F.I.F.A., 1974.

15) ibid, p.60.

16) ibid, p.52.

17) ibid, pp.58—59.

18) ibid, p.58.

19) 東京高等師範学校校友会蹴球部編，前掲書，33頁。

20) 前掲書，33—34頁。

21) 前掲書，34—35頁。

22) 前掲書，35—36頁。

23) スミス，S. 編，『サッカー上達の秘訣』，ベースボールマガジン社，82—85頁。

24) 竹腰重丸，前掲書，95頁。

25) 前掲書。

26) 前掲書，91—94頁。

27) スミス，S. 編，前掲書。

28) 竹腰重丸，前掲書，84—91頁。

(三)

前章で述べた通り，『フットボール』には附録として，各ポジション別に，記者等の実戦的体験に基づいた技術的・戦術的解説が記されている。その内容は，初級者を対象とする理想的競技者像の追求と共に，当時実際に行われていたであろうサッカー競技の内容構造が，部分的にではあるが具体的に示され，わが国サッカー競技の歴史的発展経過を技術的・戦術的立場から検証するに当っては，その原点を示唆する資料的価値を評価し，充分な検討を加える必要があると思われる。よって本章ではその記述に従い，移入された当初におけるサッカー競技の実体的内容構造に関して，技術的・戦術的立場からの若干の考察を加え，以後の展開経過の原点を明ら

かにする作業を進める。

ゴール・キーパーに関しては，前章で述べた沈着果断の精神に富める人とした条件に加えて，「身体は長大で一挙一動苟くもせず沈着にして而も，敢為機敏，且つ常に綽々とした余裕を存する底の人を要す」[1] と述べ，特にその理想的な性格特性の必要を強調している。又，「敵が数十歩も遠い時には，ゴール・ラインから二・三歩進んで居て敵に乗ぜられない策をなし，漸く敵が近づくに及んでは，最早やゴールの最中のラインの上が尤もよい位置である」[2] とし，シュートに対しては「ボールが高く来れば直ぐ手でなぐりかえし」[3]，「近く来れば脚で直ぐ蹴返したがいい」[4] として，ボールを手で受け止めても蹴り返すような隙は殆んどないと述べている。「手でやるには勿論平手ではだめであって握り拳をしっかりとかためて，うんという程，ボールをなぐってやる」[5] として，ボールを横方向にやるように指示し，「敵が我が前に近づいて居る場合は悠々手にとるが如きことは断じてやってはならぬ」[6] として，「ボールを手にとる瞬間に於ては敵はゴール・キーパーに向って突貫して来るは必然である」[7]，「をめをめしてボールと共にゴールの中に押し込まれるが如き不覚をとっては我が全軍の意気にも及ぶ」[8] と述べている。これは当時の競技規則がゴール・キーパーの「ボールの持ち運び」を禁止しており，相手側競技者の猛然たる体当りが予測されていたと共に，攻撃側からの遠距離のシュートや速いスピードのシュートが殆んど無かったことを示唆している。この，ゴール前に飛来するボールを直接的に蹴り返し，なぐり返すために，前方に位置し，相手側が接近して来るとゴール内に撤収する位置どりは，キック・アンド・ラッシュ戦法[9] を主とする初級者の競技において日常的に観察されるもので，最終的守備者としての役割分担に，その専門的技術が伴わないこと，及び攻撃技術が未熟なために，自陣ゴールにボールが近接しなければ得点される危険性が高まらなかったことに起因しているのであり，そのためにゴール・キーパーは第三のフル・バックとしての役割を兼務し，より一層勇猛果敢な性格特性が重視されたものと思える。自陣ゴールに向って来るボール

に対して，積極的に立ち向って行くことを基本的行動様式とするゴール・キーパーの技術的特性を示す好個の例としては，コーナー・キックに対する防禦体制をしいた場合，そのコーナーに遠い方のゴール・ポストの傍に立ち，キックと同時にゴール中央に来るように指示されている手法に如実に現れている[10]。つまり，静止してボールを受けることは体当りの格好の標的となるからである。ペナルティ・キックに際しては，心を冷静に保ち，キックの方向を予測して対処すべきで，多くの場合「強い熱球を地上一・二尺の高さに多少左方に蹴ってよこす（之はゴール・キーパーが普通左が利かないのを利用するのである）からよく之を心掛けて置かねばならぬ」[11]と述べているが，これ等は現在においてもそのまま通用する事例である。味方の攻撃に際しては心の油断を戒め，「ゴール前を緩歩することにつとめねばならぬ」[12]として，「甚だしきは競技者でない者と雑談に耽って居て，ボールがどこにあろうと味方はどうなろうと一向に頓着しないで居るが如きは以ての外である」[13] と述べているのは，このような緊張感の欠除した仲間内の競技しか行い得なかった当時の状況が示されたものであろうか。

フル・バックに関しては，その防禦第二線の性格上「他の競技者とは違い，些細な失錯も著るしい結果を生ずる」[14] とする安全第一主義の立場を明らかにし，その任務の第一要件は奪球 (Tackle) であるとして，強蹴も必要であるが，そのためにはまず相手のボールを奪う必要があり，相手の攻撃の方法を研究して，然る後に応戦の策を講ずる必要があると述べ[15]，その方法として，アウト・サイドからセンターへのパスに対しては，両者の中間に突進し，インナーからセンターへのパスに対しては，ボールに向って突進し，急に方向を変えてパスするボールを遮り奪う策等が述べられている[16]。就中，最も良くその技術的水準を示していると思われるのは，アウト・サイドからアウト・サイドにパスするボールを奪う方法として，素速く蹴り手に向って突進し「この時は必ずしもそのボールを奪はないで宜しい。蹴り手に妨害を加へるのが目的である」[17] 等々と述べられている点で，強大な身体を利しての猛烈な体当りで相手の進路を防害し，一旦奪ったボール

は大きく相手陣に蹴り返すような競技展開が想像されるのである。この段階では，まだ地域防禦と対人防禦を明確に区別する意識は形成されていないものと考えるのが妥当であるが，ゴール・キーパーの役割に関し，両フル・バックとの連携が大切とする立場から「三人は左右前後に常に連絡して全軍を安全に置く事殊に守勢となれる場合には尤もこの事が重要である」[18]と述べられている点等から，いかなる状況でも両方のフル・バックは自陣のゴール前に位置し，味方の攻撃時においても前方には進出しない，完全な地域防禦が行われていたものと思える。これは今日においても，未熟練者が数回の競技を経験し，その運動様式をやや理解しかけた段階で最初に発現させる戦術的行動の一つであり，相手陣に向って単純にボールを蹴り進める，未成熟の攻撃手段に対しては有効な守備陣型であり，競技者各個の専門的な役割分担を示す最初の兆候として注目される。フル・バックの重要な任務の一つとしてのキックに関しては，当書は約六頁を費いやして解説を加えているが，その表現は極めて抽象的で，キックは実際的経験を積み重ねる以外に上達する方法はないと結論づけている。キックは，今日でも，未熟練者の運動学習経過で遭遇する最大の障害の一つで，キックに関する脚の動作を極めて細密に分析し，それを知識として未熟練者に与えたとしても，正確かつ強力なキックを行うことは出来ない。物を蹴るという動作に日常性は無く，多くの場合脚筋力不足等が原因で遠くにボールを蹴ることが出来ず，全力で蹴ろうと意識するために調整力を失って，より一層失敗を繰り返すことになる。学習する時間に余裕がある場合には，脚筋力増強を目指して，緩るく転がって来るボールを止めずに蹴り返す等の反復練習が繰り返されるが，ここで定着するキックの技術は，応用の利かない鋳型化されたもので，ボールを止めたり，方向を変えたりする動作が必要になると，その成功の確率は著しく低下する。然しながら，この段階の実際の競技では，一方の不正確なキックは他方の不正確なキックで相殺され，例え正確なキックを行い得たとしても，それを受け止める側が失敗を繰り返すために，キックの失敗に起因する一方的な結末は起り得ず，正確なキックに対

する認識が正しく発達しない。不正確かつ遠くに飛ばないキックの代償として，狭い地域を，競技者自身がボールを追い駆けて走り回ることによって，競技展開が図られるのを常道とする。従って，この段階の未熟練者にとって必要なことは，常にボールを止める蹴る技術に優れた熟練者と共に競技して，その正確なキックに関する正しい認識や，空いた地域の有効な利用の仕方を体験的に学習すると共に，前方に蹴って走るいわゆるドリブルを主とした学習経過を尊重し，これを正しく発展させることによって次段階のキックを主とした競技への展開を図ることが重要なのである。

ハーフ・バックに関して，当初は，攻撃はフォワード，防禦はフル・バックとゴール・キーパーの任務であって，ハーフ・バックは遊撃手と考えていたが，経験を重ねるうちに「重大な役目であることを悟った」[19]として，激しい活動の必要なことに言及している。中盤におけるボールを奪う法として「ボールを奪う秘訣は，決してボールを目がけて行ってはならぬ。是非そのボールを持って来る敵を妨げてボールを放させるという事を忘れてはならぬ」[20] と述べているのは，フル・バックの奪球の方法と同様に体当りによる守備が極めて普通であったことを示しており，その技術水準は今日の初級者のそれと変りがない。その反面，ボールを保持している相手側の攻撃者を，自分の後方に位置せしめることを厳しく戒め，直ちに駆せ返ってボールを奪う努力をせねばならぬとして「ここが最も骨の折れる所で，ハーフ・バックが特に非常の精力を持っていなければならぬというのは，このような場合が屢々起るからである」[21] と述べ，ハーフ・バックの最大要務としての攻撃と守備の切り換えに対する認識を示しているのは注目に価する。

センター・ハーフに関しては「常に敵のセンター・フォワードに対抗しなければならぬ役」[22] として，常時相手を監視下に置き，ボールのスピードを考慮に入れて，終始遠ざからぬように位置することが肝要とする見解を示し，特に相手のウイングがボールを保持している場合の注意を喚起している。これは近代サッカー競技における対人防禦の原則と相通ずるもの

があり，地域防禦の原点としての2バック・システムにおいても，攻撃に際して最も脅威的なポジションとしてのセンター・フォワードに対しては，専任の守備者を張り付けて警戒を怠らなかったものとして，後年の3バック・システムに至る過程の原点をここに求めることが出来よう。

ハーフ・バックの内，特に両側に位置するいわゆるサイド・ハーフに関して，攻撃の場合はスロー・イン及びコーナー・キックの担当者としての役割分担が課され，防禦に際しては相手側の両翼に対抗する位置どりから「敵のウイングの運んで来るボールを，始めから中の方へやらせぬように即ちセンターに渡さないようにするのが，最上の策である」[23] として，2バック・システムによる典型的な守備隊型としての，ウイング・フォワードへの油断のない監視が義務づけられている。この一連の記述内容からは，近代サッカー競技における攻防の要としての中盤担当競技者像は想起されず，その守備的任務の重要性に対する認識がまず最初に形成され，次第に競技水準が高まるにつれ，その攻撃的役割の比率が増大する経過をたどったものと理解出来る。

フォワードに関しては，ウイング，インナー，センターの三部門に分けてその役割を示している。ウイングに関しては「何んなゲームでも規則・方法に外れない限り，掛引きという事をする」[24] として，この掛け引きに熟達すれば自分は余り働かずに相手を苦しめ，労せずして相手を操ることが出来るとする認識を示し，相手側競技者との間に成立する戦術的展開の原点を「力の経済性」に置いていることは極めて注目に価する。近代サッカー競技はその結果が重視されるから，戦術理論の構築の過程で「力の経済性」に対する配慮に欠ける傾向にあることは周知の通りであり，これはトレーニング理論及び方法の発達によってもたらされた，競技者の基本的運動能力の向上に基づく，より以上の「力の蓄積」を前提として始めて許容されるべきであって，発達過程の途上に位置する競技者に対しては，自ずから相応した戦術理論が適用されるべきである。ウイングの役割は「ボールを敵地に深く運んで，自分の方のセンターに蹴渡し，ゴール攻撃の機会

を与ふもの」[25] とし，この役割を果たすための資質として「動作の軽快なること」，「ボールを扱ふに巧なる事」，「馳ける事の速きを要する事」の三点を挙げている[26]。動作の軽快とは「敵がボールを掠奪せんとし自分が取られまいとする時は実に危機一髪の瞬間を争ふもので一瞬間でも動作の早い方が目的を全うするものである」[27] とする意見に集約的に示されており，ボール扱いの巧みさとは「身体ばかり軽快に動いても足の修練が不十分でボールが之に伴って動かねば何の効もないのである」[28]，「敵の妨害を避くると同時にボールを失はぬだけの技倆を伴はねばならぬ」[29] として，そのためには「二人三人とフィールドに出て互にボールを取り合ふのである。斯くボールを弄ぶ間には自然とボールの性格もわかり，筆にもかけぬ口に述べられぬ所謂呼吸を会得し得るものである」[30] として，ボール・コントロールの重要性に言及し，その練習法について述べている。又，馳ける事の速さについては，一時的な速さでは効果が少なく，一試合を通して速さを持続することの重要性を説いているのである。これ等の認識は極めて専門的立場のそれであり，ウイング・フォーワードの記述を担当した細木[31] の競技水準は極めて高かったものと思われる。守勢に立った場合の一般的心得として「フォワードは全く力を用ふる必要はない。ゴール・キーパー，フル・バック，ハーフ・バックの三者に一任して居てよろしい」[32]，「甚だしく後方に退いて防禦を助ける事は，却って不得策である」[33] と述べ，攻守の役割分担の立場を明確にしている。これは，全員攻撃，全員守備を目指しての有機的な連携を理想とする今日的戦術理論とは相反するものであり，技術水準が著しく低く，競技様式に充分に習熟しない段階では，それぞれの競技者が重複して担当しなければならない役割を，出来得る限り細分化し，単純化して相互に分担することによって，明らかな目的意識が形成されることが期待されたものと考えられる。つまり，得点し，ゴールを守る，とする概念を，より実際的な行動様式として具体化する手段が各ポジションごとに講じられ，その自分の担当部門を全うすることによって，必然的に全体が組み上がり，目的を達成するために機能すると考えられ，

各競技者のポジション別の適性は，その基本的立場を維持するものとして重要な意味をもつのである。

センター・フォワードに関しては「その位置の関係上から，最後に敵のゴールに蹴込むのは殆んどセンター・フォワードの任務」[34] として，両ウイングからの，今日言うところのセンターリング・ボールを受けてシュートする方法に熟達すべきだとし，短距離（ゴールに三・四間位い）のシュートは足の側面で行うのが良く「若しも蹴ったボールが敵のゴール・キーパーがうまく手で受け取ったなら，すかさず飛んでいって，体を以ってゴール・キーパーをボール諸共ゴールの中に押し込む」[35]，「この時兎角手で押したくなるが，手を用いてはならぬ。体で押さなければ反則となる。体を少し横に向けて，腰と肩とで押せば，大低は入ってしまふ」[36] と述べ，日常的な体当りによる得点に言及しているのは，この時代のサッカー競技の特質を良く現しているものと思われる。相手側のゴール・キックに際しては，常にミス・キックに乗じてゴールを狙う事を心掛けるべきで，ゴール・キックの通常の落下点にフォワード全員が下がる必要はなく，後方のハーフ・バックにまかせて，フォワードは前方に進出してゴールを狙うのが至当であるとする意見は，そのキックの正確さや飛距離が極めて未熟であったことを示している。ヘッディングに関しては，頭でやるのではなく前額部で行うのが良策で，ボールの落下点に直立してボールを注視し「すぐ目に来るといふ時，少し仰向けになって居た頭を僅に起こして真直にするとボールは恰度額にあたる」[37] として，「全体ヘッディングは，足や体で間に合はぬ時の窮策であるから，頭より外では届かないボールに限って，これをやるので，低いボールや，前に落ちるボールは，不便な頭をもってやる必要はない。要するにヘッディングは成るべくやらぬ方がよいのである」[38] と述べ，その明らかな苦手意識を示している。

このゴール・キックのミスに起因する得点や，ヘッディングに関する苦手意識は，今日，大学の体育授業等の未熟練者対象の競技でしばしば観察されるところで，その技術水準には明らかな共通点を感ずることが出来る。

つまり，未熟練者に対しても，鋳型化した競技者配置と，各々の具体的な目的意識を明確にした役割分担を与えることによって，サッカー競技の如き複雑な内容構造を持った集団競技においても，速成的に，その運動様式を形成することが可能であり，やがて運動様式の理解が促進されると，後は実戦的体験を積み重ねることによって，ある程度の技術的・戦術的展開が期待出来るとする立場である。然し，ここで与えられるポジション別の役割分担は，その習得に比較的時間を必要とする本来的なボール・コントロール技術とは異質なものである場合が多いから，必ずしもその後の展開経過が順調に進行するとは限らないのである。

当書の内容は決して高度な技術水準を示したものではないが，その体験的技術解説を述べた部分には，サッカー競技の先駆者としての気概が溢れ，前者においては競技規則の理解と競技様式の修得がその目的の大部分を占めていたのと比較して，サッカー競技としての技術的・戦略的な展開が起動したことが示唆されるが，その方向は，形式的な競技者配置を原則としたポジション別の技術特性の抽出であり，ボールに対するコントロール技術としては極めて未分化で，その技術習得に必要な方法論的立場は，実戦体験の積み重ねを主としたもので，必ずしも学習者の便宜に整合していない。然し，ポジション別の技術特性として示される分野での理解程度は相当に高く，その攻撃及び守備の競技者に求めている資質を抽出した手法は極めて高く評価して良い。又，相手側競技者との間に「力の経済性」に立脚した「掛け引き」が存在するとした認識は，実戦的体験を通して，戦術的展開が起動し進行する，主要な経路を示したものとして注目されるが，その技術的・戦術的展開は記者等の競技水準を著しく越えるものではなく，発展経過の未来を予測させるものではない。

1) 東京高等師範学校校友会蹴球部編，前掲書，129頁。

2) 以下38) までの引用は，9)，31)，を除き，全て前掲書からのものである。

9) 竹腰重丸，前掲書，28—30頁。

31) 細木志朗，東京高等師範学校を卒業した後，埼玉師範で教鞭をとり，同時にサッカー部を指導して，埼玉サッカーの今日の基礎を築いた人。『輝く埼

玉サッカー75年の歩み』に詳しい。

（四）

サッカー競技においては，異質な二つの集団が一個のボールを奪い合い，その主体性を確立することによって，目的を完遂しようと努めるのであるが，相互の集団の内には，ボールを媒体として，味方の競技者同志をいかに有機的に関連づけるか，又，相手側集団の関連をいかに断ち切るか，とする命題と，どのように競技者配置の基本原則を定めてその攻守の機能を効率的に発揮させるか，とする命題とが常に併存している。一般的には，前者を戦法又はスタイル，後者を戦型又はシステムと呼んでいるが，この両者の間には極めて密接な因果関係が成立している。つまり，戦法は競技者の所属する地域の民族的気質や風土を色濃く反映させつつ，時間的経過のうちに，漸進的にその内容を形成して来たために，集団としては容易にその戦法を変更出来ない，やや固定的な傾向があり，戦型はその戦法に整合するように調整されるのが常だからである。

サッカー競技の母国，英国における戦法の展開を，ボールを保持する攻撃的立場からみれば，1880年代にドリブルを主とした競技様式からロング・パスを主とした競技様式へと移行したのを手始めに，次第にスコットランドの主導によるショート・パスの有用性に目覚めつつ，競技者個々の技術的熟成を伴った戦法的対立のうちに，1950年代まで，サッカー競技としての熟成過程の主体的立場を保ち続けたものと考えられる[17]。本章では，1920年代のわが国におけるサッカー競技の技術的・戦術的展開を論議の対象とするが，これは，わが国のサッカー競技が，欧米文化移入の一端として，英国において必然的な発展経過を経て一定の競技様式に固定化されたものを，まず知識として導入したものであり，原初的なフットボールが，遂次，技術者・戦術的熟成過程を経て，近代的スポーツ競技としての形態を示したものとは異質であるところに着目し，運動様式の転移を主題として，その後の発展経過にまで近接することによって，サッカー競技の基本

的な技術的・戦術的学習過程に拘る諸問題を探ることを目的とする。そのためには，まず，英国における初期段階の発展経過を概観し，その戦法・戦型の形成過程を明らかにする必要がある。

1850年代から1860年代にかけての英国の多くのクラブ・チームの戦法・戦型は，マス・ドリブルを多用して相手側を攻撃するため，ゴール・キーパー1，フル・バック1，ハーフ・バック2，フォワード7乃至8を基本的競技者配置となす，極めて素朴なフットボールであった[2]。それは，初期段階の競技規則では，ボールより前方に位置する競技者はオフ・サイドとしてボールに関与することが禁じられていたことに起因し，その競技様式は現在の如くの散開型でなく，ドリブルで相手陣に突入する一人の競技者の後方から，他の競技者達が密集して追随し，力で相手側の妨害を排除してゴールを狙う極めて単純なものであった。1870年には，ボールより前方に位置する競技者であっても，自分と相手側ゴール・ラインの間に三人以上の相手側競技者が居れば，ボールに対して関与して良いとする競技規則が加えられ[3]，以後の戦法・戦型の展開に大きな影響を与えることになる。1872年，イングランド対スコットランドの最初の国際競技が開催された。当時のスコットランドでは，今日，クイーンズ・パーク・フォーメイションとして知られるゴール・キーパー1，フル・バック2，ハーフ・バック2，フォワード6の戦型が常用され，味方競技者間で積極的にボールを受け渡す，いわゆるパスが多用されていた[4]。このスコットランド・スタイルの競技様式が実際の競技で目覚ましい成功を収めたことを契機として，イングランドにおいても2：2：6とする競技者配置が通常のものとなり，キックを多用して相手側を攻撃する手法を駆使して，ドリブル主体の競技様式を打破した[5]。竹腰は，これをキック・アンド・ラッシュ戦法の時代と呼んで[6]，次の様な三原則を示し，初級者の必然的競技様式としての立場を明らかにしている[7]。

1) ボールのあるところが味方ゴールに近い程危険度が高く，遠い程安全であって，技術水準が低い程，その安全度の差が著しいこと。

2)　ゴール前に相手側競技者の数が多くなると有効なシュートが仕難くなり，技術水準が低い程その傾向は強まるので，早く相手側ゴールに達するように速攻すること。

3)　技術水準の低い者程パスの成功率が低いので，出来るだけ手数をかけずに大まかに攻めること。

1888年，プロフェッショナル・フットボール・リーグが開始され，その多くのチームは２：３：５の戦型をとって，攻撃と守備のバランスをとることに留意した[8]。両サイドに位置するウイング・フォワードは，速いドリブルをもって相手陣に攻め入り，中央部にパスを送り込むことによって得点を図った。この戦型で特に重要な役割を荷負ったのがセンター・ハーフであり，攻撃面ではフォワードに追随して中盤におけるボールを支配し，両サイドからのセンターリング・ボールがセンター・フォワードを越えて来た場合は，自ずから走り込んでゴールを狙う等の積極的な攻撃能力と，守備面における中央部全域にわたる行動力，冷静な判断力，等を兼備して自軍を指揮する能力等が求められたのである[9]。竹腰は，これをロング・パス戦法の時代と呼び，わが国においては1923年から24年頃までは，この戦法が支配的であったと述べている[10]。これは戦型的には２バック制の時代として周知せられる時代であり，わが国に移入されたサッカー競技は，年代的には，この段階に相当するが，実際は，竹腰の示したキック・アンド・ラッシュ戦法の三原則がそのまま適用出来る競技水準にあったことは前章において示した通りである。

1925年，オフ・サイド規則が従来の三人制から二人制に改正された[11]。これは，三人制オフ・サイドの規則を利用して，２バック・システムの一方の守備者が，ハーフ・ラインを越えて前方に進出することによって，残された相手側フォワードを人為的にオフ・サイド状態に追い込む，いわゆるオフ・サイド・トラップが多用され，得点が激減したことに起因する[12]。1923年から24年のＦ．Ａ．リーグ第一部の平均得点は2.47点であり，これは史上最少の数字である。オフ・サイド規則の改正後の1925年から26年のシ

ーズンには平均3.68点にまで上昇しているから，この改正は極めて効果的であったことが知れる[13]。オフ・サイド・トラップが多用出来なくなると，自陣の守備をより堅固にするために，センター・ハーフが相手側の得点源であるセンター・フォワードに密着してマークする手法が生まれ，二人のフル・バックは両翼に散開する相手側のウイングをマークする，いわゆる3バック・システムの時代を迎えるのである[14]。この戦法では，両翼のウイングの活動がフル・バックによって抑制されるのに比して，中央部においては，三人のフォワードに対抗して守備を専らとする者はセンター・ハーフ一人であったために，攻撃の主体が中央部に移行し，隣接するフォワード間で比較的自由にボールを受け渡すことが可能となり，いわゆるショート・パスの時代に入るのである。1920年前後の英国においては，ロング・パス主導型から，スコットランド・スタイルのショート・パス主導の影響が強まり，力強さ，速さ，勇気，などと共に，次第に技術的に高度なものが要求される時代に入ったと考えられるのである[15]。その後，サッカー競技が凡世界的規模に伝播される過程で，ショート・パスの主体性はますます確固たるものに成長するのであるが，現在の如き，大量・高質の情報伝播が可能な時代にあっては，その戦法的特色は，高度な熟練性を伴った特殊能力を有する競技者達の個性的技能に被覆され，次第に均一化傾向を示しながら，その実体的内容構造を分別し，抽出する作業を極めて困難ならしめている。つまり，近代サッカー競技にとって戦法・戦型は，相手に即応してどの様にでも変化し得る事が必須の要件であり，前章で述べた如く，競技者各個の役割分担が攻守にわたってますます広範多岐になって来たために，ある集団を定型化した戦法・戦型に特定することは極めて難事になりつつあるのである。

わが国におけるサッカー競技の発展過程には，飛躍的に技術・戦術を向上せしめた幾つかの要因が存在している。外国文化移入の一端としてのフットボールが，その実体的内容構造が不明確なまま，単なる集団によるボール蹴りとなって定着し，そこに競技様式について解説した指導書による

知識が加わり，やがて横浜等に居留する外国人達との実際の競技を通して，未熟ではあるが内容構造解明の端緒が開かれた。これは様々な国内情勢，特に学校教育部門における内容充実という時流に乗って各方面に展開し，師範学校・中学校・高等学校等に新たにサッカー競技を愛好する集団が形成される機運を生み，やがてこれは国内大会の開催や国際的大会への集加と直結するのである。

大正6年（1917年），東京芝浦で行われた第三回極東選手権大会蹴球之部に，当時国内最強と目された東京高等師範学校の単独チームが日本代表として参加し，中国・フィリピンと試合を行った[16]。大会第二日目（大正6年5月10日），まず中国と対戦したが5対0で敗れた。当時の新聞は，「午前十時半ウイルス氏のレフェリー，日本軍の先蹴にて開始せしが，凡ての点に於て支那の技倆数段の上にあり開始三分にして唐のコーナーキックを郭受けて先ず一点を収めしを始めにし前半に四点，後半に一点を入れしに反し日軍は数回のコーナーキックを得たるも得点するに至らず五対零にて日本軍大敗す」[17] と報じている。大会第三日目にはフィリピンと対戦したが15対2で敗れ，「午前九時三十五分ウイルス氏のレフェリー比軍の先蹴にて開始せしが，前半戦開始後三分にして比軍アレアンタラのキックに一点を挙げしを始めとしアルトナガ，ラマス，グナト等の奮戦に依りて前半に五点と後半に十点を得たるに反し日軍振わず漸く前半中央線前方のタッチより渡辺のパッスと藤井のキックに一点を得たるのみ十五対二にて日本軍再び惨憺たる敗北をした」[18] と伝えている。出場選手の一人竹内は，「支那も比律賓も吾等の敵ではありません。殊に支那は比軍よりキックにおいて一日の長があります。コーナーキックを頭で受けてゴールに入れる策戦や蹴り方が左右同様に利き，横にも後方にも自由である点などは大いに学ぶべきだと思います。支比両軍の陣容を見るに支那は前軍に精鋭を集め，比軍はフール・バックに傑物を備へました。故に支那の攻撃は見事で比軍の守備にはなかなか堅固でした」[19] として，その学ぶ点の多いことを述べている。大正10年（1921年）上海で行われた第五回極東選手権大会に

は東京高師，同附属中学，青山師範，豊島師範，東大の各校代表選手より成る全関東チームが代表として参加，前回同様フィリピンに3対1，中国に4対0で完敗したのである。この全関東蹴球団は海外遠征に当り，国内予選を終えて代表権を得たのちに，数回にわたって高等師範学校の校庭でチョー・ディンから指導を受けたようである[21]。このチョー・ディンの指導も，わが国サッカー競技界においては技術的展開の重要な一因となったものとして看過出来ない。つまりボールを蹴って走るサッカーから，味方同志が相互にパスを受け渡しながら攻撃するサッカーへの転進である。竹腰は「大正12年1月に開始された第一回全国高校(旧制)大会に早稲田高等学院が優勝したが同校の優勝によって，そのチームをコーチしたビルマの留学生チョー・ディン（Kyaw Din）氏の名が全国に伝わり多数の者がその指導を受けた。いわゆるショートパス戦法は同氏の指導を受けた人たちによって普及され拡充されたものであって，同氏がわが国サッカーの近代化に貢献したところは多大であった」[22] と述べ，新田は「隅田川に沿った蔵前の高等工業学校へ留学していたビルマのチョー・ディンが東京にいたのは関東大震災をはさんで足掛け5年くらいだったが，高工の煉瓦造校舎が地震で全壊し，授業再開がいつになるか見込みがつかないということもあってほうぼうの学校へコーチに回ってくれ，また，指導を受けた側も日本人らしく研究的に消化してショート・パス戦法というものを身につけることが出来たのである」[23] と述べ，チョー・ディンの指導によってロング・パス一辺倒であった当時のわが国のサッカー競技が，新たな技術的展開を示したことを評価している。

以下は，このチョー・ディンの指導したサッカー競技の技術的・戦略的構造が如何なるものであったかを，大正12年に刊行されたその著『How to Play Association Football』の記述に従って検討し，それによってわが国におけるサッカー競技の技術的・戦術的展開過程の一つの段階を明らかにしようと試みたものである。

チョー・ディンはサッカー競技の肉体的技術の修得は比較的容易である

が，困難なのはその道徳的部分であるとする基本的認識から，利己的ならざること，忍耐心を要すること，規律的なること，辛抱強いこと，気転を利かすこと及び判断の速かなること，肉体的に有意義なること等々の条件を掲げて[24]，この競技の隆盛なることを望むとして，「蹴球が日本に紹介せられ既に三十年にもなりながら，爾来，甚だ顧れざる状態の下に置かれ，為に其の発達の，実に遅々たるものであったと言う事を聞き，余は実に遺憾に堪えない」[25] と述べている。彼はこの書を公にするまでに在日二ケ年の経験を有し，その間にわが国の蹴球家達の多くの欠点に触れたとして次の六ケ条の忠告を行っている[26]。

1) 競技中に絶対に利己的な立場をとらず，自分一個の功名を想わず，統一された全体の努力こそが成功への道であること。

2) Play the Games and not the Gallery. とする句が全ての蹴球家の理念であること。

3) スポーツマンであること，敵のファールに怒らないこと。

4) 敵を背後から攻撃しないこと。

5) 奇声や不快な声を発しないこと。

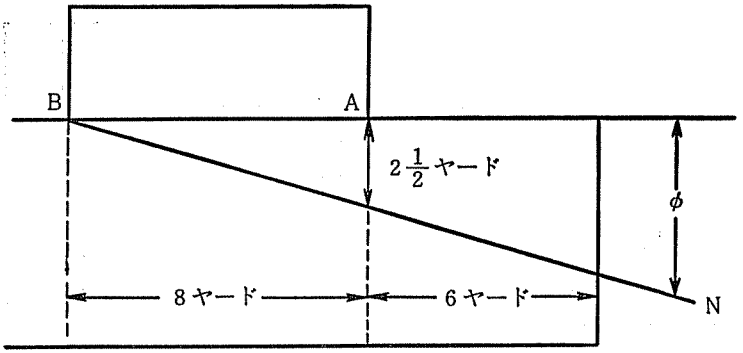
6) レフェリーに対して絶対に忠実であること。

この忠告と同様の記述は前稿で示した『アッソシェーション・フットボール』にも見ることが出来るから，これ等のことが，わが国サッカー競技においては極めて日常的に行われていたことは明らかで，特に利己的立場や個人的功名心について再三の忠告が述べられているのは興味深い。彼は言う，「余が滞日中に屢々目撃せる処あり綜合するに一般に攻撃を第一に守備を第二に置いて居る様に考へられる。之は大いに誤られた考であって守備と攻撃と何れが主何れが副と言ふ事は絶対にあるべき筈のものではない」[27] と。この考え方は今日では極めて当然のこととして受容されるが，わが国のサッカー界では攻撃は最大の防禦なりとして攻撃第一主義の観念が長期に渡って支配的であり，それは選手の基本的配置としても，技術的に上位の者から順に攻撃的ポジションに起用する傾向があったこと等から

も明らかである。

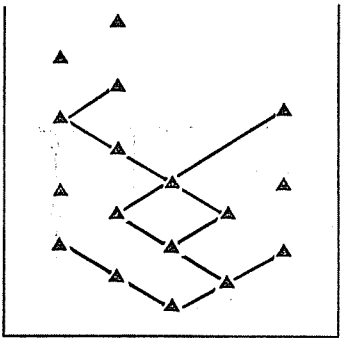
次に各ポジションの競技者適性についてチョー・ディンの考え方を概観してみよう。まずセンター・フォワードは攻撃の中枢であり，攻撃の成功と否とに最も大きな責任を有し，肉体的に強力であると同時に頭脳の働きも明敏であることが望まれるとして，その技術的特性は左右何れの足でもゴールより20ヤードの距離から正確なシュートが打てることが必要で，同時に左右何れの方向にもパスすることが出来，特にヘッディングに優れていなければならぬとしている[28]。彼は言う，「此のヘッディングは往々にして，大なる努力が練習中に払はれぬ様であるけれども之を用いる事の出来ないセンター・フォワードは，恰も銃器を携へずして戦場に赴く兵士と，異なる所がないのである」[29] と。先に述べた極東選手権大会の戦評にも，中国・フィリピンのヘッディング能力に関する論評があった通り，当時のわが国では，特にヘッディングを多く用いることがなかったものと思われる。インナーについては活動が容易で動きに強いことが要求され，センター・フォワードを補助して攻撃に参加することが主たる任務とされている[30]。ウイングはランニングが速いことが必要条件で，ゴール・シュート能力よりも味方にパスする能力が求められている[31]。センター・ハーフは先に述べた如く最も重要な役割を務め，攻撃に際しては味方のフォワードをフォローして中盤を制し，守備に際しては相手側の攻撃の主力であるセンター・フォワードを制する役目を分担し，最も多く球を得て，ここに適材を得なければそのチームはほとんど勝味がないとして，相手側ゴール・キックに対してはヘッディングで応じ，強く正確なるキック能力が求められている[32]。サイド・ハーフについては，その主たる役割は相手側のフォワードの連絡を断って味方のフォワードに球を送り，攻守何れにもその役割は重要であるが，直接的にゴールを狙う機会はほとんどないとされ，常に防禦に務め，タックルするに適当な時期を速やかに掴み，味方及び敵の動作を良く注意し適当なる所にボールを送ることが必要で，これは強いボールである必要はなく，正確にボールを供給するキック能力が求められ，ド

リブル能力は必要なしとされている[33]。これは現在言うところの中盤を構成する競技者の原型とも言うべき認識で，ショート・パスの有用性を示す明らかな部分である。フル・バックに関してはタックルするか否かの判断力が強く求められ，両サイドのフル・バックが自陣ゴールに対して並行に位置することが厳しく戒められている[34]。ゴール・キーパーに関しては身長，走力，視力，跳躍力，良き判断力が求められ，シュート・ボールに対してはボール・キャッチが前提とされていて[35]，これ等にみるポジション別の技術特性は，前章で述べたそれよりも明らかに近代的サッカー競技に近接していると思われる。更に当書では，競技者個々の基本的技術に関して著者自身をモデルとした連続写真を含む多数の写真解説を附していて，その基本的技術の抽出方法や連続写真に見られるフォームからチョー・ディンの示す技術水準は極めて高度なものと推定出来る。つまり，キックとは競技者にとって最も重要な技術であるとして，トー・キック，インステップ・キック，サイド・キック（フロントパート），サイド・キック（バックパート），アウトサイド・インステップ・キックの五種に分類し，特にサイド・キックについて，「日本の人々は未だ此のキックの価値を会得せざる如し」として，この種のキックは弱いけれど甚だ正確なもので，隣接する味方へのパスとしてはなはだ有効だと述べ[36]，従来の日本サッカー界に欠落していたショート・パスの有効性を力説している。又，シュート練習をする場合は入り易い角度と距離から試みるべきで，最良の距離はゴール・エリアとペナルティー・エリアの中間位いで「フォワードはペナルティーエリアの外よりシュートする必要ある場合は殆んど絶無にしてゴールキーパーも防ぐ事容易なり」と述べ，シュートの場合は決してゴールを見るな，ボールを見よとしている[37]。ウイングのシュートについてコーナー近くからの無用のシュートを戒め，「ボールがコーナー近く来れば敵のゴールキーパーは必要的にゴールポストAに来たりてゴールを守る。而してゴールキーパーは略二ヤードの半径の周囲は完全に守り得るものとしてAを中心とする二ヤード半の円に接する線をBのポストより引けば此のBN線以内

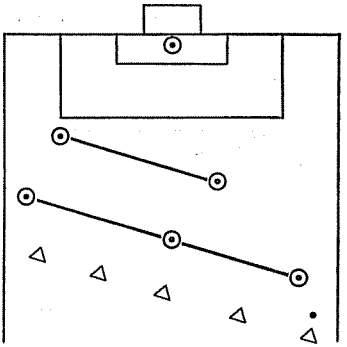


図—1　How to Play Association Football P-39 より転載。

に入りたる位置よりは如何なるシュートも無効なり。此の角度をとおれば $\mathrm{Sin}=2\frac{1}{2}\div 8=0.3125=18°15$　即ち約20°，　約20度以内よりはゴールに至る如何なる線も皆Aを守るゴールキーパーの守備の中を通過する故全然無効なり」(図—1参照)としている[38]。これ等に関して竹腰は，大正11年に山口高等学校で同氏の指導を受け，キックやヘッディングの正確さに驚嘆し，「それにもまして大きな収穫であったのはキックやヘッディングのフォームやタイミングについて簡単な物理を適用して考えることを教えられ，サッカーは考えることのできるスポーツであることを知ったのであった」[39]と述べ，「同氏の指導を機として精神力と慣れのサッカーから，フォームやタイミングと照し合せて原因・結果を追求する科学性を加えた練習法が進歩したので，種々の技術が飛躍的に向上していったわけである」[40]とチョー・ディンの指導の影響力の大きかったことを評価しているのである。ドリブルやタックルに関しても，その技術を段階的に分析して解説し，練習に際しては「先ず要領を呑み込み，次に遅き速度でそれを行ひ，次第に速度をはやめて練習する」[41] 手法が説かれ，この段階的指導原則は今日においても全く変りがない。特にタックルに関しては今日言うところのスライディング・タックルの技法が紹介され，多数の写真及び図解を添えて解説しているところから[42]，この技術がわが国では未発達で，特に視覚的



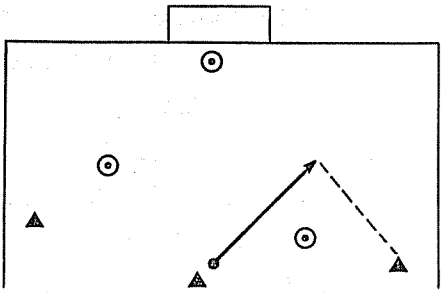
図—2



図—3

にその技術的経過を示す必要があったものと思われる。これはヘッディング技術についても同様で，「日本に於てはヘッディングはまだ極めて幼稚の域を脱せず大なる改良進歩を必要とす」[43]として，「欠点の大なる一つはプレーヤーがヘッディングをする適当の場所を知らざるにある」[44]と述べ，前額部及びその左右の側面によるヘッディングを紹介し，「頤の運動は大なる関係あるものにて，ボールの角度はそれによりて定まる。頤を高く突き出せば，ボールはそれだけ後へ行く」[45]としている。

基本的な競技者配置として，攻撃に際してのフォワードの位置は図—2が示され，前進してもこの位置関係を崩さぬようにすべきだとし，防禦線として「ハーフ及びフル・バックを結びたる線は守勢に有る時は常に二つの平行線をなしてゴールラインと四十五度の角度を保つ様に心掛くべし」[46]として図—3を示している。又，スルー・パスに関して，「スルウパッスは日本に於ては余り行われず，此のパッスは非常に速やかなフォワードを得たる時に有効なり，此種のパッスはフ



図—4

ォワード二人位が特に前方に進みボールを得たる時に行はる」[47] として図—4を示している。これ等一連の技術的・戦術的基本原則は，従来のわが国サッカー競技の欠落部分として認識され，以後の技術的展開の方向性を示唆したものとして評価出来るのである。

1) Lodziak, Conrad., op. cit., pp. 21—28.
2) ibid.
3) Rous, Stanley., Ford, Donald., op. cit., pp. 25—26.
4) Lodziak, Conrad., op. cit., p. 22.
5) ibid.
6) 竹腰重丸，前掲書，28頁。
7) 前掲書，28—29頁。
8) Joy, Bernard., op. cit., p. 52.
9) Lodziak, Conrad., op. cit., pp. 29—32.
10) 竹腰重丸，前掲書，32頁。
11) Rous, Stanley., Ford, Donald., op. cit., pp. 58—59.
12) Lodziak, Conrad., op. cit., p. 23.
13) 拙稿，サッカー競技の得点推移，その比較と分析を中心として，成城大学法学会，成城法学教養論集，第1号，昭和54年。
14) Lodziak, Conrad., op. cit., pp. 24—25.
15) ibid.
16) 日本蹴球協会，『日本サッカーの歩み』，44頁，講談社，昭和49年。
17) 東京朝日新聞，大正6年5月10日。
18) 前掲紙，大正6年5月11日。
19) 前掲紙，大正6年5月13日。
20) 竹腰重丸，前掲書，20頁。
21) 日本蹴球協会編，前掲書，70頁。
22) 竹腰重丸，前掲書，32—33頁。
23) 日本蹴球協会編，前掲書。
24) モン・チョー・ディン，"How to Play Association Football"，大正12年。
25) 以下，47)まで，39)，40)を除き前掲書からの引用である。
39) 竹腰重丸，前掲書，33頁。
40) 前掲書。

（五）

近代的スポーツとしてのサッカー競技の技術や戦術は，特殊な能力を保有する競技者や，指導的立場に在る人々が創造的に開発し運用したもので，それ等の運動形態が，国際的立場を含む実戦的場面において成功を収めることによって固定化し，様々な情報伝達手段を通して伝播され，やがて公共性を帯び，初めて客観的存在としての技術・戦術として認知されるようになる。この情報伝達に際しての比較的有効な手段は，視覚的認知による運動形態の模倣であり，模倣が繰り返され，習熟過程を経ることによって，そこに類似した運動形態が形成される可能性が生じる。然しながらこの段階では，指導者が学習者の理解を促進し，類似した運動形態を形成し易くするために，便宜的手段として，その技術や戦術の運動形態を鋳型化し形式化して伝達したり，単純化した運動様式を反復練習させることによって，学習上の合理化を図ることは決して稀ではない。然し，このようにして形成された技術や戦術は，環境や周囲の状況の急激な変化に対応する柔軟性・適応性に欠ける場合が多い。

明治期にわが国に移入されたサッカー競技は，その集団的運動形態の模倣という，ごく通常的な伝達手段を取り得なかったから，指導書や少数の指導者を通してのみ，抽象的概念としての運動形態を具体化しつつ，学習上の効果を図らねばならなかった。たとえ集団的運動形態に接する機会があったとしても，サッカー競技の如く複雑な運動形態を有する集団的競技の場合，その攻撃や守備の技術的・戦術的側面は，対立する集団間の相対的存在であるがために，集団の技術的・戦術的水準の差によって，若干変容して表現された可能性が高く，その実体的内容構造を抽出することは，優れた観察者の分析をもっても容易なことではなかったと思われる。

わが国サッカー競技の先駆的立場の東京高等師範学校においては，横浜等に居留する外国人達との実戦経験を積み上げる機会を有してはいたものの，その競技の得点経過から推量すれば，この外国人達の競技水準が著しく

高かったとは思えず，技術的・戦術的展開の方向性を正しく認識し得たかどうかは疑問である。従って，東京高等師範学校を通してしかサッカー競技の運動形態に触れ得なかった他の集団では，技術的・戦術的展開を図るどころではなく，まず運動様式を模倣し，実際の競技を行い得る，形式的要件を整えることが先決であったと思われる。そのためには，まず戦型的理解を促進させ，形式的な競技者配置を前提として，各個の競技者に単純化した役割分担を課し，ドリブル又はキックで出来得る限り速やかに，相手側ゴールを目指して突進する戦法がとられた。この戦型・戦法は，異質なものに出会うことなく大正12年頃まで続き，そこで初めて，チョー・ディンの示すショート・パスや，極東大会におけるフィリピン，支那等の極めて性格を異にしたサッカー競技の存在に出会うのである。これは，同じ競技水準を有する集団間の競技では，技術的・戦術的展開は期待出来ず，異質な集団同志の対立を通して，初めて内容構造の変化が生じることを示している。又，戦法は当該競技者の技術的・戦術的熟成経過の程度に即応して，必然的に形成されるものだけではなく，意図的に，外的条件として集団に附加することによって，逆に技術的・戦術的進歩が期待出来るものであることをも示すものであるが，明治・大正期の如く，スポーツ的環境が国際的に閉鎖的な状況では，他からの情報の流入が少く，低水準の同質集団間の競技のみしか行われなかったために，チョー・ディンの指導を受ける以前には戦法的刺激は程んど受けることはなかったと思われる。

黎明期のサッカー競技における技術的・戦術的展開は，極めて遅々としたものであったに相違ないが，東京高等師範学校フットボール部刊行の指導書が，わが国の教育機関にサッカー競技を普及させる上で，極めて重要な役割を果したことは，これまで述べて来た通りである。然し，それが本来的なサッカー競技が内蔵する，粗野で荒々しく，自由で創造的な運動形態を，教育的配慮を重視した，形式的で硬直化した内容構造の運動形態に変容せしめたものだったとしても，それはサッカー競技の実体的内容構造が不明確なまま，競技規則を先行導入せざるを得なかった当時の状況に原

因を求めるべきであり，本論が対象とした指導書等の価値をいささかでも減ずるものではない。

長期間の熟成過程を経て，運動形態を遂次的に形成し続けて来た英国のサッカー競技においては，攻撃と守備における合理性が，国際的競技会を含む多くの実戦的経過を経て，淘汰を繰返しながら定着し，伝承され，一つの戦法・戦型としての客観的容認を受けたものと考えられ，その組織的行動の原理は，高度な身体的能力や技術的・戦術的習熟を伴った極めて完成度の高いものである。それに反し，わが国のそれは，知識としての展開が主であったから，若干異質な運動形態が発生したとしても不思議ではない。チョー・ディンの示した，わが国の競技者達への指針は，この異質な部分を若干でも補うものとして有意義であり，わが国のサッカー競技史上で始めて技術的・戦術的展開を起動せしめたものとして高く評価しなければならない。特に，隣接する味方競技者間の短いパスの有効性に対する考え方は，その技術的熟成を刺激したものとして極めて画期的な試みであり，サイド・キックの有用性について述べる彼の見解は，わが国におけるサッカー競技の技術的・戦術的展開の契機となったものとして位置づけられる。然しながら，その後の展開経過は，必ずしもショート・パス多用の傾向を示したとは言えない。サイド・キックによるボールの受け渡しの技術的・戦術的習熟には比較的多くの時間的経過を必要としたことや，競技場整備の状況が不良でショート・パスの運用に不適格であったこと，勝利至上主義，特に成功と不成功を分ける部分において，ショート・パスを多用し，中盤において競技構成を行うような，より可能性の高い手段を模索する継続的な競技様式をとるよりも，計画性には欠けるが，一発勝負的な冒険的手段が好まれる国民的気質等から，実戦的経過における実効性の比較において，大きなキックや勇ましい突進力を伴う競技様式が選択され，国際的に閉鎖的な環境の内で，異質なサッカー競技に出会うことなく，ボール・コントロールに関する技術的熟成を伴わないままに経過し，ショート・パスの有用性に対する正しい認識が育たなかったものと思える。

サッカー競技の技術や戦術を学習する過程を考慮する場合，その歴史的な展開過程の必然性に着目し，検討を加える必要があることは，これまでにも縷々述べて来たが，その展開過程のどの段階で，何を契機として，技術や戦術の有用性に対する正しい認識が芽生え，成長したかを検討し，確認することは，学習過程の進行状況に即応した技術や戦術に関する的確な知識を供与するに際して，極めて重要な役割を果すものと考えている。

原初的なサッカー競技においては，強大な身体，旺盛な闘争心，集団に対する熱烈な忠誠心，等が競技遂行に関わる絶対的必要条件であり，運動様式としては，味方競技者達の力強い補助を前提とした，ボールを自己の支配下においての前進，つまりドリブルを中心とした攻撃型であったものが，オフ・サイド規則の改正により，前方に位置する味方競技者へのキックによるボールの伝達が可能となり，この手法が一般化すると，必然的に競技場全体における有効かつ経済的な競技者の配置が問題となり，競技者各個の役割分担を前提とし，守備力は攻撃力の相対的存在として重要な意味を持ち始める。やがて，これは各競技者間の有機的な連携としてのショート・パスによる攻撃の有効性を生み出すのである。一方，守備的側面における展開は，複数の攻撃者に対する一人の守備者から出発し，やがて一人の攻撃者に対する複数の守備者となって帰結する。然し，守備力の根本は，ボールを保持している競技者は常に一人であることを理由に，攻守それぞれが一人対一人の状況において，味方の競技者の助力を必要とせずに相手を押さえ切る個人の能力を基本的原理とするものである。攻撃力が競技者間の有機的な連携だとすれば，守備力は，それに対応して個々の競技者の能力が，集団の必要性のために組織化されることを必然とし，個々の競技者を組織化する過程にこそ，戦術的展開が生まれるのである。ボール・コントロールに関する技術的熟成を伴わない段階においては，攻撃面においては，力強さや速さが，ある程度までそれを代償出来るとしても，守備力が攻撃力に対応して発展するこれまでの経緯から考えると，守備者各個のボールを奪う能力は，攻撃者のボールをコントロールする能力と同水

準までしか発達しないことが予想し得る。然し，それでは全く異質な他の集団と競技した場合には，攻守の一対一の平衡に欠ける状況が生まれてしまい，この状況を打破するためには，自集団内の攻守の役割分担の平衡を崩して，守備側に相手を上回る，より多くの競技者を充当せざるを得なくなる。

技術や戦術の歴史的展開は，これまで述べて来た通り，決して別種のものに変化して来たのではなく，従来からの要素に新たに工夫し創造された要素が積み上げられた経過を示している。従って，時代が進めば進む程，初級者の学習対象となる範囲が広がると同時に，個々の競技者の役割分担はますます多様で過重なものとなり，その習熟に関わる時間が，より多く必要となるのは当然のことである。だから，それと並行して学習過程に対する工夫や創意が進行して，歴史的発展経過をより以上に短縮して体得することを可能とし，技術的・戦術的展開を早期に発動させ，推進する，具体的な手法を確立することは極めて重要な課題なのである。